

震災伝える海を越えて

被災地の高校生が長期留学

東日本大震災後、被災地の高校生らが、奨学金で世界各国に長期留学している。被災体験を発表したり、同世代と対話したりして「高校生外交官」として奮闘中だ。ただ、今後も継続していけるかは、留学先の善意や民間の寄付にかかっている。



福島県大熊町で被災した有本温子さん。留学した途から一時帰国し体験を語った11月9日午前東京都中央区で撮影された。

不幸だとは思わない 支援の恩返ししたい

「慣れない海外で苦勞もあるけど、様々な国籍の友達に助けられている。人生の大きな財産になると思います」。米メリーランド州の全寮制高校に留学中の有本温子さんは9日、都内で被災地の高校生ら約50人を前に語った。

福島県大熊町の自宅は東京電力福島第一原発から3キロ。避難所を4カ所転々とした後、いわき市内の仮設住宅へ家族で移った。昨年、財団法人教育支援グローバル基金が被災した若者の教育支援をする事業

「ビョンドトウモロー」の高校留学プログラムに合格。昨夏の渡米前には、来日したクリントン米国務長官(当時)の前でスピーチをし、米軍による復興支援に感謝を伝えて「将来は外交官になって恩返ししたい」と語った。

「一番伝えたいのは、震災で人生は激変したが、決して不幸だとは思わない

「被災地の高校生向けに1年以上の長期留学費用を全額支給する奨学金プログラムは、国際教育交流団体AFSも設けている。ビョンドトウモローとあわせてこれまで合計17人が10カ国へ。さらに11人が今夏、留



マレーシアに留学中、民族衣装で記念撮影する藤井理子さん(左)、日本人提供



高橋奈々美さん(17)AFS提供

岩手県立盛岡第一高校2年の藤井理子さん(18)は、昨年1月からマレーシアに1年間留学した。

大熊町の病院に入院していた祖父を津波で亡くした。留学先の授業で、被災地の写真を見ながら体験を伝えた。地震が起きたらどう身を守ればいいのか、級友の質問に「火を止め、机の下に潜る」と答える

「被災教育がほしい」。原発事故については「放射能で東日本には入ること

「被災地の高校生向けに1年以上の長期留学費用を全額支給する奨学金プログラムは、国際教育交流団体AFSも設けている。ビョンドトウモローとあわせてこれまで合計17人が10カ国へ。さらに11人が今夏、留

「被災地の高校生向けに1年以上の長期留学費用を全額支給する奨学金プログラムは、国際教育交流団体AFSも設けている。ビョンドトウモローとあわせてこれまで合計17人が10カ国へ。さらに11人が今夏、留

寄付激減で奨学金不足

ビョンドトウモローの高校留学プログラムには欧米の全寮制高校5校が参加。学費、寮費を卒業まで免除している。さらに企業などの寄付金により、同財団が生活費として月2万円を支給する。

津波で母を亡くした宮城県石巻市の女子生徒(17)を受け入れているイスの高校は「今後、他の生徒の推薦がなければ、サポートを検討する」(留学担当者)と話す。継続するかどうかは各校の判断による。ビョンドトウモローの担当者は「受け入れてくれる学校を増やしたいが、震災から2年たち、相当説明しても難しい」と語る。

AFSはより深刻だ。1年分の留学費150万円を全額免除する制度は民間の寄付金でまかなう。昨年と今年の派遣数は10人を超えたが、来年度の募集は7人。特に米国外の派遣先も減った。震災直後にあった企業からの大口寄付が減り、このままでは再来年以降は募集できなくなる恐れがある。

(杉山藤子)